

## 創造の泉：“つながり”を強化しよう

“つながり”という言葉の意味と力とを考えてみたい。微生物が病原体である可能性を示唆したルイ・パスツールは、化学における分子の立体構造の予測、ウィルスの培養とワクチン開発など数々の業績で著名であるが、エコール・ノルマル・シュペリール高等師範学校時代には5段階評価に翻訳すると3レベルの評価を受けるごく平凡な学生であったそうである。彼が微生物と病原体との“つながり”に着想を抱いた頃、病気が伝染することは全ての医師が知っていたそうである。また、微生物に関し、生命は生命から生まれるという観点も多くの支持を獲得していた。パスツールの業績は、この2種類の現象を一緒にし“つながり”を看破した点にある。一方、蒸気機関時代を拓いたジェームス・ワットは、当時すでに開発されていた蒸気機関の修理に従事している最中に操作方法が劣っている点に悩み続けた。現場起点の問題記述から解を導出するために彼は当時の蒸気機関と凝縮器との間の“つながり”に着想し、繰り返して動力を獲得できる今日の蒸気機関を創造している。この二人に限らず、過去数多ある創造性ある仕事の源泉は、“つながり”を見出すことにあると言える。

本誌（技術革新と社会変革）は、社会技術革新学会の学会誌であるため、学問における“つながり”について考えてみたい。学問とは、一般的には、体系化された知識を指している。知識が孤立していたら学問の蚊帳の外である。しかし、知識が別の知識と“つながり”、専門と呼ばれる機能を発現できる知識集合体に組み込まれた時に学問としての知識が誕生する。現場で体得した知識を自分の中に留めておいたのでは、自己体系知識のままである。しかし、他の知識体系と自己の知識との間に“つながり”を見出したとき、その知識には人類が知識の世界で追求している“普遍性”という極めて大きな価値が与えられる。本誌に掲載された論文は、もはや自分誌上の論文ではなく、社会技術革新学という体系化された知識に貢献する論文という価値が被せられる。仕事で迷路から脱せられない時、迷路から脱することができた先人の知識に触れることは極めて重要である。皆で共有化できる知識を出し合い、この学会誌を大きく育てていただきたいと考える。

本誌第3巻の編集作業中、特記すべきことに遭遇できた。著者には、論文の最後に“引用文献”を組み込んでいただいている。これは、その論文と他の知識体系との“つながり”を明示するために置いている。学問を創造する上でとても大事な論文の要素である。今回、ある著者の引用文献リストの中に本誌“技術革新と社会変革”の名称が本誌開設以来、初めて登場した。本誌投稿論文

の知識と、本誌に以前投稿された論文の知識との間に“つながり”ができたことは、編集作業を担当する者にとってはとても嬉しい出来事である。今後、多くの投稿者が、本誌掲載論文の知識と自己が開拓した知識との間の“つながり”を明確化し、社会技術革新学の体系化に貢献していただきたい。

知識の“つながり”はビジネスにとって有用なのであろうか。パスツール、ワットの場合、知識の“つながり”は発見、発明に直結している。ビジネスを生み出すための技術革新の奥義には創造性開拓があり、知識の“つながり”は重要中の重要事項であることが分かる。知識の担い手は人間であるため、知識の“つながり”を強力にするには、人と人との“つながり”である人脈を蜘蛛の巣(Web)の如く発達させることが大切である。現場で抱いた問題意識を自己完結させるのではなく、本会の討論の場に持ち込み、他人や他の知識との“つながり”の中で解決の糸口を探る手立てを常習化することをお勧めしたい。さらに、本会の中だけで自己完結させるのではなく、本会を起点にして他の学会、教育機関、研究機関、民間企業、行政機関などに“つながり”を拡大し、難問に対する業務をメガコンペティションの急スピードに敵う速度で展開するコツを悟っていただきたいと考える。

本誌は、現場を起点とし産学官が“つながり”、協働して研究するという斬新な領域を開拓している学術誌である。また、学会に集う一人一人が主役である知識の“つながり”誌である。本誌に仕事への思いを込め、厚い人脈形成に“つながる”成果を出していただきたい。

編集委員長 太田口和久

(本務, 東京工業大学大学院理工学研究科教授)

E-mail, ohtaguchi.k.aa@m.titech.ac.jp)